

【原著】

追跡調査に基づく東北大学AO入試の評価

倉元直樹（東北大学高等教育開発推進センター）、大津起夫（大学入試センター研究開発部）

推薦入試とともに、AO入試に対する信頼が揺らいでいる。批判の骨子は学力低下の風潮にあってそれらが学力抜きで大学に入学する経路とみなされたことにある。一方、導入当初から「学力重視のAO入試」を前面に掲げてきた東北大学のAO入試に対する学内の評価は高い。本研究では、追跡調査によって東北大学のAO入試入学者の成績が一般入試による入学者と比較して相対的に良好であることを実証的に示した。その結果を基に、証拠に基づく入試設計の重要性について論じた。

1 AO入試の理念と批判の構造

平成20年末に発表された中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（中央教育審議会、2008）の審議状況を巡る報道を発端に、推薦入試やAO入試に対する信頼が大きく揺らぎ始めている。

推薦入試は昭和41年度から導入されたマルA推薦に続き、昭和42年の大学入学者選抜実施要項から登場して文部省（当時）の公認を得た。推薦入学の導入は、試験地獄解消の手段として捉えられていた（中村、1996）。

一方、AO入試（アドミッション・オフィス入試）は平成2年度に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）で導入された入試方法に命名された新しい方式の大学入学者選抜を端緒とする。米国流の入試と誤解されることも多いが、名称を借りただけで実際の共通点は少ない。SFCに追随する大学は多くなかったが、平成12年度入試に四つの国公立大学に導入されてから、爆発的に広がった。当初、AO入試には明確な定義はない（大学審議会、2000）とされ、選抜方法の内容は各大学の創意工夫に委ねられていた。個別大学に入試の裁量権が大幅に認められたという意味では、それまでには見られない画期的な入学者選抜制度であったと考えられる。実際、先鞭をつけた当事者自身も、自らが実施してきたAO入試について『書類審査』と『面接』による選考という現行のSFCのAO入試は何らかの一般的な枠組みを示すものではなく、SFC型とでもいえるべき一方式に過ぎない

（慶應義塾大学、2006）」と位置付けている。

ところが、多くの大学は「SFC型」の選抜方法をAO入試における唯一の範型と捉えたようである。平成12年度の時点で大学審議会（2000）も「アドミッション・オフィスなる機関が行うというよりは、学力検査に偏ることなく、詳細な書類審査と時間を掛けた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受検者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定しようとするきめ細やかな選抜方法の一つとして受け止められている（以上、下線筆者）」との認識を示していた。

以上のように、推薦入学とAO入試は起源も導入時期も全く異なるにもかかわらず、いずれも実質的には「受験地獄の解消」という長年の教育政策課題への対応策と位置付けることができる。例えば、平成9年6月に発表された中教審第2次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、「第2章 大学・高等学校の入学者選抜の改善」の第1節をまず「過度の受験競争の状況」と題して「過度の受験競争の緩和が必要であることを改めて確認」した上で、第2節「大学入学者選抜の改善」の中で「推薦入学の改善」等の諸策とともに「アドミッション・オフィスの整備」を提言している（中央教育審議会、1997）。実際には、AO入試は少子化の進行と大学進学率の向上によって「受験地獄の解消」という教育政策的な課題自体が大枠としては自然解消していたはずの時期に本格導入されてしまったのである。そういう意味で

は、AO入試の導入時期は不運なタイミングだったと言えるのかもしれない。

推薦入試やAO入試に対する批判的な論調が共通して立脚している視座は「学力問題」である。AO入試は、推薦入試と同様に学力チェックを受けずに大学へ入学可能なバイパスルートであり、志願者減に見舞われた大学が受験生を青田買いする仕組みと認識される傾向にあるようだ。中央教育審議会(2008)においても「推薦入試やAO入試における外形的・客観的な基準が乏しく、事実上の学力不問となるなど、本来の趣旨と異なった運用がされているのではないかと懸念も示されている。」といったやや婉曲な表現ながらも、学力問題の存在を指摘している。そのためか、平成23年度入試からAO入試に対しても入学願書受付始期が設定され、学力把握措置が課されることとなり、AO入試に一定の枠が課せられることになった(文部科学省高等教育局大学振興課長, 2009)。以上のように、AO入試は教育政策的には受験地獄の解消を目的とした「大学入試の多様化」の文脈で捉えられるべきである。

ところで、一口に「多様化」と言っても多義的で、文脈によって指し示す内容に違いがある。大学入学者選抜実施要項を典拠とするならば、具体的には「選抜資料の問題」、「学生集団の問題」、「受験機会の複数化」が挙げられる(倉元・當山・西郡, 2008)。その観点から見れば、SFC型AO入試は「選抜資料の多様化」と「学生集団の多様化」の組合せとみなせるが、ユニバーサル段階の選抜方法としては、自ずから構造的限界があった。

AO入試の拡大期は少子化の進行と同時に大学の収容力が拡大し続け、教育問題に関する関心の中心が受験の過熱から学力低下への懸念に移り変わった時期である。そもそも、SFC型AO入試は高い学力を保持している受験生を前提として「個性と才能を発掘する(孫福・小島・熊坂, 2004)」側面を持つエリートモデルの入試であった。したがって、この選抜方式が広範に広がるとは想定されていなかったのである²⁾。

すなわち、SFCが考案したAO入試とは、中等教育段階では教科指導中心の高校教育を所与の条件とした上で初めて成立する学力検査中心の大学入試を主流とする大学入学者選抜制度の下、例外的な位置付けで機能することが期待された方法だったのである。

AO入試が多くの大学に普及し始めた平成12年度の時点ですでに、SFC型AO入試が野放図に拡大した場合には高校以下の教育を学力的に支える仕組みが存在しないことが懸念されていた³⁾。実際にはSFC型のAO入試が成立する前提条件が崩れていたにもかかわらず、SFC型を雛型とする選抜方式が際限なく拡大を続けて行ったために、AO入試は導入意図とは異なる方向に向かって行くことになったのだと見ることができる。

2 学力重視の「東北大学型AO入試」

一方、東北大学でのAO入試に対する認識は先述のような学力度外視の入試といった見方とは対極の位置にある。すなわち、東北大学の学内では「AO入試による入学者は優秀」というイメージが浸透しているのだ。

東北大学のAO入試は、平成12年度に工学部、歯学部の2学部体制で導入された。導入の可否や選抜方法には各学部の意思が尊重されてきた。ところが、それでもAO入試を導入する学部が徐々に増え、後期日程の廃止を契機に全学部が導入するに至ったのである。その背後には、SFC型とは異なる「東北大学型AO入試」のコンセプトの貢献があったと思われる。

東北大学では導入当初から「学力重視のAO入試」を掲げ、選抜方法もそれに則る方式を採った。東北大学におけるAO入試の主要区分は「AOⅡ期(センター試験無)」と「AOⅢ期(センター試験有)」に大別される⁴⁾が、全ての区分で入念に学力的側面に関するチェックを行う仕組みが整っている(表1参照)。例えば、「適性試験」、「小論文試験」といった名称の試験も、学力向上の努力を抜きにしては対応不可能であり、その事実は学校等の求めに応じて提供して

いる過去の問題集を参照すれば明らかである。現在では、AO入試に割く定員の割合は約17.6%と、東北大学と似たような規模や立場の他大学と比較しても非常に大きくなっている⁵⁾。

先述の入試多様化の文脈では、東北大学のAO入試は「選抜資料の多様化」と「受験機会の複数化」の組合せ(倉元・當山・西郡・石井, 2009)であって、一般入試と異なる層をターゲットとする入試ではない。東北大学のAO入試は「第一志望者のための特別な入試機会」と位置付けられている。したがって、AO入試に向けた受験準備と一般入試への準備が重なるように制度設計されている。提出書類も必要最低限に抑え、選抜のために高校に負荷をかけない配慮がなされてきた。受験生側から見た可否の見通しも立て易い。医学部医学科等の一部の区分を除いて倍率は高くないが、実質的には高水準の競争が維持されている。学力的に粒揃いの受験生が集まるため、受験者集団全体が研究中心

大学としての「求める学生像」に合致していると考えてよい。したがって、選抜場面に過度な負担をかけずに、学力も意欲も高い学生を確保できることが大きなメリットである⁶⁾。

受験生側から見ても、たとえAO入試で不合格になっても、実力を兼ね備えていれば、一般入試で再チャレンジの機会が得られる。近年では、AO入試で不合格になった後に一般入試を突破して合格する学生が毎年コンスタントに150名を超している。200名近くに達した年度もある。また、原則、書類審査だけで不合格にしない等、受験生の心情への配慮もあるためか、受験当事者からの評価も高いことが分かっている(西郡・木村・倉元, 2007)。

学力重視であっても、AO入試と一般入試との差異は明確に存在している。すなわち、一般入試が専ら「学力を基準にした選抜」を行うのに対し、AO入試では学力に加えて「東北大学でやりたいことがある」学生を求めている。

表1. 平成22年度東北大学AO入試Ⅱ期・Ⅲ期の選抜資料*

	学部	出願要件(成績)	第1次選考	第2次選考
AOⅡ期	文学部(H21~)	調査書(学習成績概評A)	出願書類(活動成果自己報告書) 適性試験(筆記試験)	適性試験 (口頭試験)
	理学部(H13~)	調査書(学習成績概評A)	出願書類	適性試験, 面接試験
	工学部(H12~)	調査書(学習成績概評A, または、評定平均値4.0 かつ理数系教科4.5)	出願書類(活動報告書)	小論文試験, 面接試験
AOⅢ期	教育学部(H20~)	センター試験6教科7科目	出願書類, センター試験成績	面接試験
	法学部(H15~)**	センター試験6教科7科目 調査書(学習成績概評A)	出願書類, センター試験成績	面接試験
	経済学部(H18~)	センター試験6教科7科目	出願書類, センター試験成績	面接試験
	医学部医学科(H19~)	センター試験5教科7科目	出願書類, センター試験成績	小論文試験, 面接試験
	医学部保健学科 (H20~)	センター試験5教科, または、6教科7科目***	出願書類, センター試験成績	面接試験
	歯学部(H12~)	センター試験5教科7科目	出願書類, センター試験成績	面接試験
	薬学部(H20~)	センター試験5教科7科目	出願書類, センター試験成績	面接試験
	工学部(H12~)	センター試験5教科7科目	出願書類, センター試験成績	小論文試験, 面接試験
	農学部(H19~)	センター試験5教科7科目	出願書類, センター試験成績	面接試験

* 出願書類のうち、「調査書」、「志願理由書」、「志願者評価書」は共通の選抜資料、それ以外はカッコ内に表示

** H21までは「AOⅡ期」 *** 5教科7科目は全ての専攻、6教科7科目は看護学専攻のみ出願可能

したがって、東北大学型 AO 入試が成功するためには、第一志望の層を掘り起こす努力と工夫が重要となる。

鍵を握るのは入試広報活動の在り方だと思われる。入試広報には状況によって様々な機能が期待されるだろうが、東北大学型 AO 入試との関連で言えば、高校生の学習に対する動機づけの機会と捉えられる。入試広報活動にも多様な内容があるが、東北大学ではオープンキャンパスが特に効果的に機能している。

東北大学のオープンキャンパスは国公立大学では抜群の規模を誇る。平成 21 年度は私立大学を含めても 4 番目の参加者数であった（朝日新聞出版、2010）。新入生に占めるオープンキャンパス参加者の比率は年々上昇し、平成 21 年度には 50% を突破した。合格に達する層の中でオープンキャンパス参加経験者は AO 入試から受験する傾向がある。東北大学のオープンキャンパスは日常の学習の延長線上に何かあるのを見出す機会である。そこで大学入学後にやりたいことが見つければ AO 入試からの受験が適しているが、そうでなければ一般入試からの受験で構わない、という構図となっている。

3 追跡調査の方法

学内では「東北大学型 AO 入試合格者」が優秀というイメージが浸透しているが、「本当に根拠があるのだろうか」という疑問が湧くのも当然のことだろう。そこで、証拠に基づいて実情を確認するために、追跡調査を実施した。

調査対象は、平成 12～21 年度「AOⅡ期」、「AOⅢ期」、「推薦入学Ⅰ」、「推薦入学Ⅱ」⁷⁾、「一般入試前期」、「一般入試後期」の入学者とした。そのうち、成績記録不在者、転学部・転系・転学科経験者は成績の分析からは除外することとした。なお、編入学や各種特別選抜等、上記 6 区分以外の入試による入学者は当初から分析の対象外とした。

従属変数となる評価項目は学籍状況と成績である。学籍状況に関しては、進級の規程が学部で異なるので在学生の学年指標は参考にできな

い。したがって、「留年しなければ平成 20 年度終了時点で卒業年度に達する入学年次」までを対象とした。すなわち、6 年制課程の医学部医学科、歯学部は平成 15 年度入学者まで、他は平成 17 年度までの入学者である。分類カテゴリーは、成績分析対象者が「ストレート卒業（飛び級を含む）」と「留年⁸⁾」、成績分析除外者が「留学」と「それ以外（退学、休学、除籍、死亡、転学部、転系、転学科）」である。

成績の分析には平成 12～21 年度の全ての年度の入学者のデータを用いることとしたが、単位として取得された科目のみが分析の対象である。平成 16 年度に成績評価方式が変更されたので、平成 15 年度までの入学者は「A: 90, B: 75, C: 65, 認定, 合格: 80」、それ以降の入学者は「AA: 95, A: 85, 以下同様（倉元・石井・鈴木、2007, 2008；倉元・大津・鈴木・橋本 2008）」として尺度化した。なお、数値で成績が記録されているケースもあったが、その場合には記録されている数値をそのまま利用することとした。評価指標は、具体的には単位で重み付けた成績（GPA）と取得単位数である。「全学教育科目等」「専門教育科目（自学部）」に分け、比較可能にするために同一学年、同一学部⁹⁾ 内で標準化（偏差値化）した。

4 追跡調査の結果

(ア) 学籍状況

全対象者数 24,327 名のうち、成績分析対象者数は 23,270 名（95.7%）、除外者数は 1,057 名、学籍状況分析対象者数は 14,747 名であった。この時期は全学部が後期日程を実施していたので一般入試の前期と後期の比較には全データを用いたが、学籍状況の分布は学部によって違いがあるため、六つの区分の比較は当該年度で AO 入試か推薦入学を実施した募集単位のみを含むこととした。

結果は表 2 に示す通りである。全体では 78.1% が留年せずに「ストレート卒業」していた。「留学」の比率は低いので、「ストレート卒業」がそのまま学業生活を概ね順調に送った学

生の指標となるだろう。一般入試前期と後期の比較では、後期日程入学者の「ストレート卒業」比率が著しく低かった。六つの入試区分では、「ストレート卒業」比率の高い順に「推薦Ⅰ」、「AOⅡ期」、「AOⅢ期」、「前期日程」、「推薦Ⅱ」、

「後期日程」となった。「前期日程」と比較すると「後期日程」と「推薦Ⅱ」の比率が低く、「推薦Ⅰ」、「AOⅡ期」が高かった。「AOⅢ期」は「前期日程」よりやや高い程度であった。

表 2. 学籍状況分析結果

学籍状況	全体	一般前後期比較		6区分比較					
		前期	後期	前期	後期	推薦Ⅰ	推薦Ⅱ	AOⅡ	AOⅢ
ストレート卒業	78.1%	79.1%	70.2%	80.1%	71.0%	87.2%	72.0%	84.1%	81.8%
留年	10.8%	11.2%	11.5%	9.7%	10.5%	8.1%	17.5%	7.1%	6.0%
留学	0.4%	0.4%	0.3%	0.4%	0.4%	0.0%	0.5%	0.5%	0.7%
退学等	10.7%	9.4%	18.0%	9.8%	18.1%	4.7%	10.1%	8.3%	11.5%
合計人数比	100%	81.7%	18.3%	67.0%	16.2%	2.2%	1.6%	6.7%	6.2%

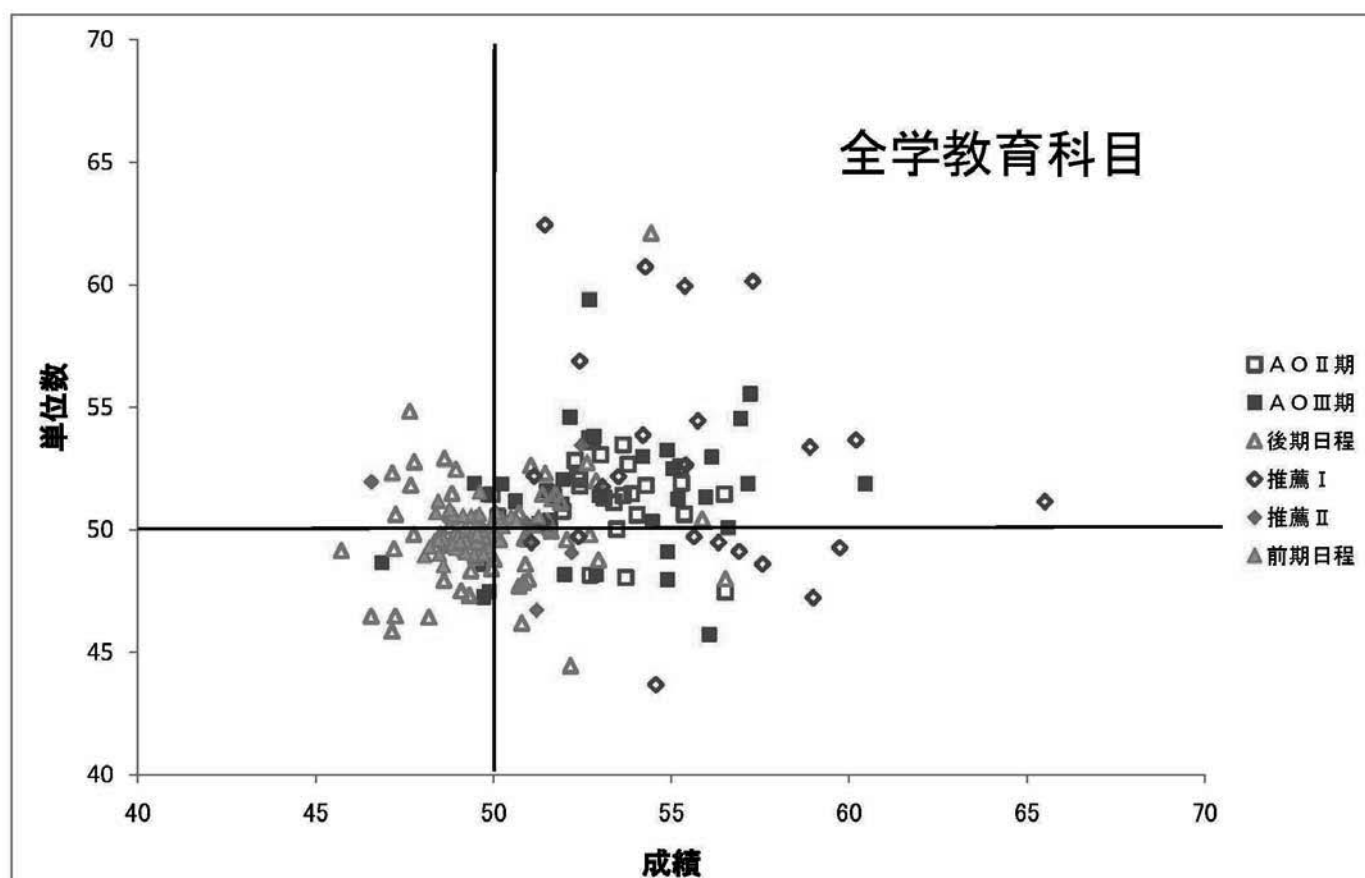


図 1. 入試区分別全学教育科目成績 (偏差値平均)

(イ) 成績

図1, 図2においては, 当該年度にAO入試, 推薦入学の少なくともいずれか一方を実施した募集単位を図示の対象とした。成績, 取得単位数ともに入試区分ごとに偏差値平均を算出し, 横軸に成績, 縦軸に取得単位数を示している。

ただし, 専門科目については履修していないか全て同じ成績が与えられていたケース¹⁰⁾は図から除いた。なお, 図1, 図2においては, 一つのデータ点が「一つの年度・学部・入試区分」に属する学生の成績の平均値を示している。

表3. 図示対象年度における募集人員

募集単位	推薦 I/II	AO入試		一般入試	
		II期	III期	前期	後期
文学部	—	10	—	200	—
教育学部	—	—	10	60	—
法学部	—	20	—	120-140	20
経済学部	15-30	—	40	185	30-35
理学部	37	37-44	—	229	58
医学部(医)	—	—	10-15	90-95	—
医学部(保)	—	—	25	119	—
歯学部	—	—	10	40	5-10
薬学部	10	—	15	60-65	10
工学部	—	75-104	100-115	504-576	117-120
農学部	10-15	—	10	115-125	25

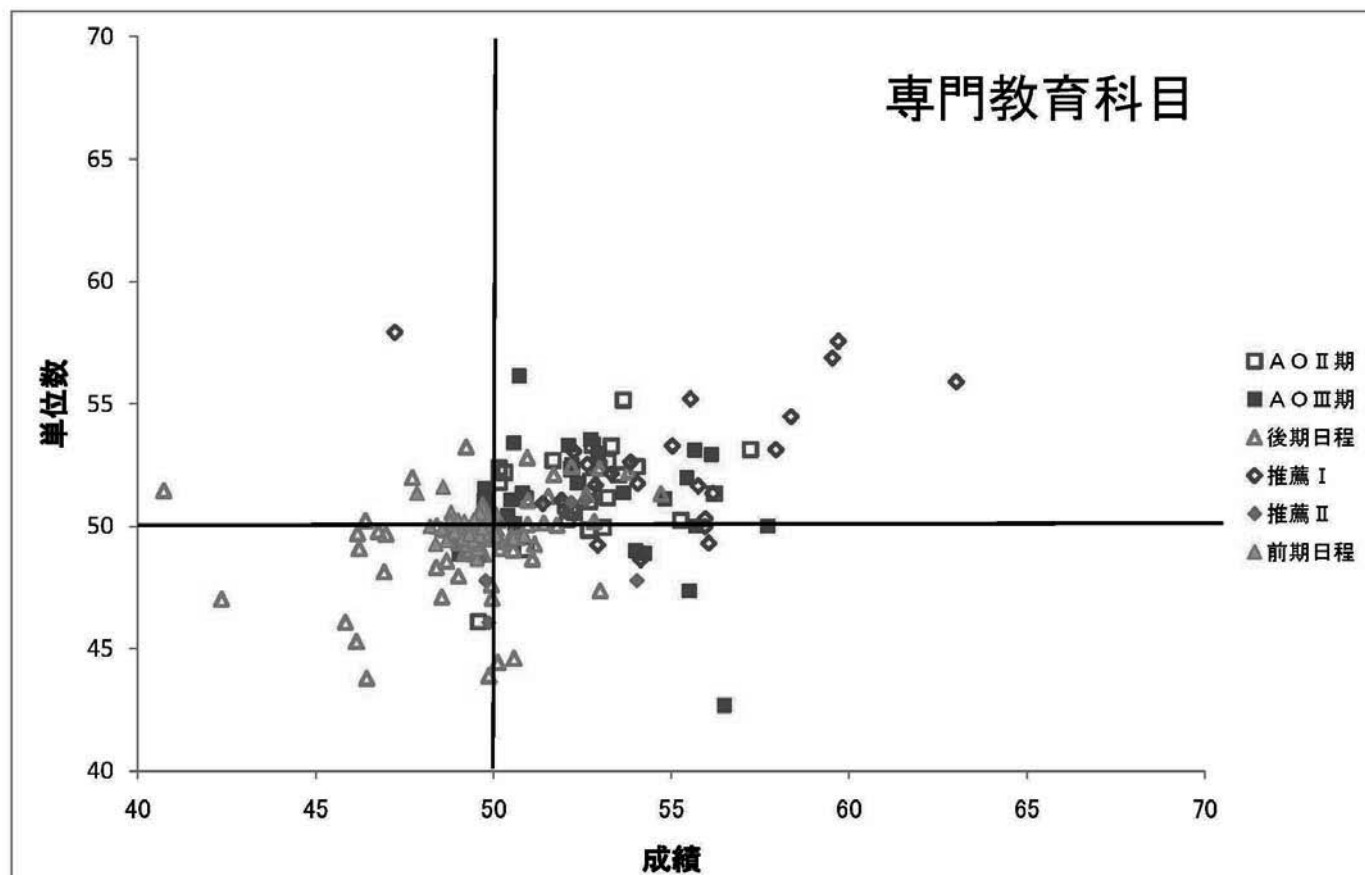


図2. 入試区分別専門教育科目成績 (偏差値平均)

各募集単位の募集人員は表3に示す通りである。データ点によって、平均値の算出に用いられた学生数には数名～数百名までと大きな幅があることが分かる。なお、年度や募集単位、学籍情報の状況が特定される情報は、本分析では詳らかにしないこととする。

図1は延べ19,043名分、図2は18,743名分の平均50、標準偏差10に標準化された単位数と成績データから作成されている。いずれも成績(横軸)はほぼ左右対称に近い分布となっているが、単位数は全学教育が正に歪み、専門教育が負に歪んだ分布となった。さらに単位数と成績には正の相関があるため、全体としては、全学教育では第1象限(単位数 > 50, 成績 > 50)に属するデータが22.3%、第2象限(単位数 > 50, 成績 < 50)に属するデータが14.4%、第3象限(単位数 < 50, 成績 < 50)に属するデータが36.4%、第4象限(単位数 < 50, 成

績 > 50)に属するデータが26.8%、専門教育では第1象限に属するデータが30.8%、第2象限が19.1%、第3象限が32.9%、第4象限が17.2%と偏りが見られた。

図1、図2からは、全学教育、専門教育とも同じ傾向を読み取ることができる。すなわち、成績は「推薦I」、「AOⅡ期」、「AOⅢ期」が良く、ほぼ全ての年度と入試区分で偏差値平均が50を上回った。取得単位数は成績ほどではないが、全体として、「推薦I」、「AOⅡ期」、「AOⅢ期」が良好であったことに変わりない。

表4-1、表4-2に区分毎に各象限に分類されたデータ比率の平均値を示す。全学教育においても、専門教育においても、AO入試で入学した学生は単位も多く取得し、成績も良好な第1象限に分類される率が著しく高いと結論づけることができるだろう。

表4-1. 各象限に分類されたデータ比率の平均値(全学教育)

入試区分	区分数	データ総数	第1象限	第2象限	第3象限	第4象限
前期日程	79	13,524名	21.1%	16.9%	37.0%	25.0%
後期日程	54	2,132名	20.5%	13.3%	37.7%	28.5%
AOⅡ期	27	1,399名	32.6%	14.1%	21.3%	32.1%
AOⅢ期	40	1,497名	30.2%	14.1%	25.9%	29.9%
推薦入学	30	491名	27.4%	11.9%	26.3%	34.4%
全体	—	19,043名	22.3%	14.4%	36.4%	26.8%

表4-2. 各象限に分類されたデータ比率の平均値(専門教育)

入試区分	区分数	データ総数	第1象限	第2象限	第3象限	第4象限
前期日程	75	13,267名	31.2%	24.1%	30.6%	14.2%
後期日程	54	2,132名	28.3%	20.8%	35.5%	15.4%
AOⅡ期	27	1,399名	41.1%	15.0%	26.1%	17.8%
AOⅢ期	36	1,454名	39.5%	22.2%	17.2%	21.1%
推薦入学	30	491名	45.4%	17.2%	20.7%	16.7%
全体	—	18,743名	30.8%	19.1%	32.9%	17.2%

5 まとめと今後の展望

表2, 図1, 図2, 表4-1, 表4-2より, 学籍状況, 成績の双方を含め, 追跡調査の全指標において一般入試入学者に対するAO入試入学者の優位性が明確に示された。この結果は, 学力重視の「東北大学型AO入試」が十全に機能してきた成果を示している。特に, 「AOⅡ期」の区分による入学者の学業的適応の良さは一目瞭然である。

もちろん, 留年しないで卒業することや大学時代の成績がその後の成功を保証するものではない。逆に, 東北大学出身者として初めてノーベル賞を受賞した田中耕一氏が留年経験者であったというエピソードなどに端的に表れるように, 学生時代に成績不振であってもその後社会的成功を収めた例は枚挙にいとまがない。しかし, だからと言って, 教育や学習の成果としての学業成績の価値を頭から否定することは学士課程教育の公的意義の否定に繋がるだろう。大規模学生調査の分析からも, 「学士力」として挙げられた概念が, 結局, 従来通りのGPAで代替可能であることが示されている(木村・西郡・山田, 2009)。追跡調査から見ると, 総じて適応状況が芳しくなかった後期日程を廃止し, AO入試に重心を移した選択は, 結果的に合理性を備えた判断だったと言える。

センター試験を利用しない「AOⅡ期」は, 現在, 3学部で実施されている(表1)。学力の判定をセンター試験に頼ることができない分, 各学部ともそれぞれの事情に応じて工夫を凝らした選抜方法を採用している。選抜場面で各学部が独自性を発揮し易い半面, 選抜に関わる教員や教務関係の事務職員が感じる相対的負担感は大きいと思われる。一方, 全体として最もパフォーマンスが良かったのは「推薦Ⅰ」の入試区分であった。「推薦Ⅰ」も後期日程と同様に順次廃止され, AO入試に切り替わってきた。現在, 農学部のみが「推薦Ⅰ」を採用している。推薦入試とAO入試の制度上の最大の違いは学校長からの推薦状の有無だが, それが入学者の優秀

性を担保する決定打になったとも思えない。「推薦Ⅰ」では書類審査に基づく一次選抜を実施しており, 学力的側面のチェックもAO入試ほど周到な手続きを踏んで配慮されているとは言い難い。逆に, 「推薦Ⅰ」を廃止した学部の中に「AOⅡ期」に相当するほど手の込んだ選抜を実践していた学部もあった。「手を掛けるほど良い入試である」といった単純な因果関係でもなさそうである。

以上を総合したとき, 個別大学における入試設計の重要性が見て取れるのではないだろうか。最も重要なのは, 基本的な入試設計のコンセプトに大きな瑕疵がないことだろう。志願倍率等, 数値として表に出て, 一見, 万人に理解しやすい指標も必要だが, 底に流れる構造的要因を読み誤るとおかしな判断に結び付く。受験生を送り出す高校側の「教育の論理」と選抜方法として具体化されたアドミッションポリシーとの整合性は, 最大限配慮すべき重要な要素と言えよう。そういう意味で, 入試実施面での手の掛け方には, ある種の工夫が必要だと思われる。

最後に残された課題は入試に投入すべき労力と効果のバランスの判断である。「推薦Ⅰ」が廃止に傾いた理由も実施負担の問題が大きいと思われる。さらに, 代替としてより効果の大きい「AOⅡ期」ではなく「AOⅢ期」へシフトした傾向にも共通の背景が察せられる。追跡調査の情報だけに基づいて意思決定するわけにもいかない。高校にとっても大学にとっても長く続けられる実施方法を模索する必要がある。

AO入試制度自体を学力低下問題に直結させるのは, 少々, 早計に思われる。個別大学により大きな自由度が許された環境の下, 各大学の裁量の幅は広い。適切な入試の設計にはどのようなコンセプトが必要なのか。大学の総合的判断力が問われているのではないだろうか。

注

- 1) 平成20年度大学入学者選抜実施要項までは「推薦入試」ではなく「推薦入学」という用語が用いられていた。

- 2) 平成5～8年度、慶應大学SFCのAO入試を担当していた藤沼貞弘相模女子大学理事長（当時）は、「学力に関するいわゆる一般入試型による、その受験生の力量を測ることは表向きは一切しておりませんが、その学部で実際に勉強している4年間で完全に卒業できる力を持っている、それだけの高い学力を持っていることが入学の前提条件になっていたことには違いありません。しばしば誤解されますけれども、AO入試では直接学力を問うことはしなかったけれども、学力とは関係ない入試ではありませんでした。」と証言している（東北大学高等教育開発推進センター、2008）。
- 3) 平成12年の時点ではすでに「学力中心の入試制度が厳然として揺るぎなく存在した時代ならば、慶應SFCモデルはそれに風穴を開ける手段として大変有効であった。しかし、教育課程が大幅に緩められた現在、それが広範囲に広がると、受験勉強のみならず肝心の『勉強』という行為そのものが空洞化してしまうのではないかという懸念が生じる。高校生、受験生に『AO入試』突破のテクニックを磨かせることは、受験勉強よりも教育的に悪い効果をもたらし、高校以下の教育を大きく破壊してしまうのではないだろうか。」と指摘されていた（倉元、2000）。
- 4) この他に社会人を対象とした「AO I期」と10月入学の帰国生等を対象とした「AOIV期」があるが、いずれも工学部のみ若干名募集の区分であり、主要な入試区分ではない。
- 5) 例えば、旧帝大系でAO入試を実施している北海道大学と九州大学の平成23年度におけるAO入試募集人員の割合は、それぞれ約2.9%、約7.8%である。
- 6) 東北大学型AO入試の考え方については、木村・倉元（2006）を参照のこと。
- 7) 平成22年度入試から「推薦入学Ⅰ」は「推薦入試」と名称変更されている。「推薦入学Ⅱ」は平成17年度入試を最後に廃止となった。
- 8) 留年後に卒業した者と在学中の者を含む。
- 9) 医学部は医学科と保健学科の3専攻が別々の募集単位として入試を行っているが、煩雑なの

で本稿では「学部」と呼ぶこととする。

- 10) 平成20～21年度入学で第2学年までのデータしか分析対象となっていない延べ4学部8入試区分が図2から除外された。

参考文献

- 朝日新聞出版（2010）.『2011年版大学ランキング』.
- 中央教育審議会（1997）. 21世紀を展望したわが国の教育の在り方について（第2次答申）.
- 中央教育審議会（2008）.『学士課程教育の構築に向けて（答申）』.
- 大学審議会（2000）.『大学入試の改善について（答申）』.
- 慶應義塾大学（2006）.「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおけるAO入試実施経験の分析と提案」平成17年度文部科学省先導的・大学改革推進委託事業『受験生の思考力、表現力等の判定やアドミッションポリシーを踏まえた入試の個性化に関する調査研究』報告書第2分冊.
- 木村拓也・倉元直樹（2006）.「戦後大学入学者選抜制度の変遷と東北大学のAO入試」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』1, 15-27.
- 木村拓也・西郡大・山田礼子（2009）.「高大接続情報を踏まえた『大学入試効果』の測定—潜在クラス分析を用いた追跡調査モデルの提案—」.『高等教育研究』12, 189-214.
- 倉元直樹（2000）.「東北大学のAO入試——健全な『日本型』構築への模索」『大学進学研究』114, 9-12.
- 倉元直樹・石井光夫・鈴木敏明（2007）.「東北大学追跡調査研究(1)——平成17年度入学者の様相」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』2, 177-187.
- 倉元直樹・石井光夫・鈴木敏明（2008）.「東北大学追跡調査研究(3)——平成17, 18年度入学者の学部別分析」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』3, 237-245.
- 倉元直樹・大津起夫・鈴木規夫・橋本貴充（2008）.「東北大学追跡調査研究(2)——平成17, 18年度入学者の全学的分析および追跡調査データフォ

- ーマット整備計画』『東北大学高等教育開発推進センター紀要』**3**, 225-235.
- 倉元直樹・當山明華・西郡大 (2008a). 「AO入試の実情調査(1)——大学入試の多様化とAO入試」『日本テスト学会第6回大会発表論文集』82-83.
- 倉元直樹・當山明華・西郡大・石井光夫 (2009). 「東北大学AO入試における調査書利用の考え方と高校側の意見」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』**4**, 147-159.
- 孫福弘・小島朋之・熊坂賢次 (2004). 『未来を創る大学——慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC) 挑戦の軌跡』慶応義塾大学出版会.
- 文部科学省高等教育局大学振興課長 (2009). 『平成23年度大学入学者選抜実施要項の変更予定について(通知)』.
- 中村高康 (1996). 「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立 —公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐる—」『教育社会学研究』**59**, 145-165.
- 西郡大・木村拓也・倉元直樹 (2007). 「東北大学のAO入試はどう見られているのか? ——2000～2006年度新入学者アンケートを基に」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』**2**, 23-36.
- 東北大学高等教育開発推進センター (2008). 第8回東北大学高等教育フォーラム『新時代の大学教育を考える(5) 高校教育と大学入試: 「AO入試」の10年を振り返る——接続関係の再構築に向けて』報告書.